

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

https://zuioji.jp

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【三十一】

後堂 門原 信典

第十九則「俱胝一指頭」寐語 ⑫

〔莫妄想〕

〔評唱〕「俱胝和尚、乃婺州金華人。

初住庵時、有一尼名實際。到庵直

入更不下笠。持錫遶禪牀三匝云

道得即下笠。如是三問。俱胝無對。

尼便去。俱胝曰、天勢稍晚、且留

一宿。尼曰道得即宿。胝又無對。

尼便行」

「俱胝和尚は、乃ち婺州金華の人なり。初め住庵の時、一尼有り、實際と名づく」

近年「お寺離れ」そして葬儀や法事では「お坊さんの宅配」「僧侶派遣」と云う言葉も生まれました。お寺と檀信徒の皆様との信頼は何処にあるのでしょうか。「たとえ故郷を離れていても、今までお寺と縁が無くて、佛教で葬儀や法事をしたい」と云うお釈迦様に帰依する心。法事をしたい、お坊さ

その庵に實際尼が尋ねて来たのです。「なるほど此処に住んでいるのは真面目な修行僧に違いない。農民の態をしていても、庵の佇まいを見ればわかる。枯淡な無為の辨道の雰囲気か漂っている」

實際尼が質朴な庵の中を覗くと、そこにはただ一人坐禅をしている俱胝和尚が居ました。

「庵に到つて直に入つて更に傘を下さず。錫を持して禪牀を遶ること三匝していわく、道い得ば即ち笠を下さんと。是の如く三たび問う。俱胝無對」

「彼が俱胝和尚か、よし」實際尼は笠も下さず、いきなり座に上がり錫杖を突きながら、最大の敬意をもつて、坐禅している俱胝和尚の周りを三回圍繞して問いました。「二句作麼生。今のあなたの境界を一言答えて下さつたら笠を外してご挨拶しましょう」實際尼は如何にも無礼な態度に思えますが、顔も見せず、正体も明かさず一切のしがらみも絆も離れた純粹な一人の修行者として接したのです。

實際尼は三度同じ事を問います。俱胝和尚は何も答える事が出来ません。實際尼は黙つて庵を去ろうとします。

「尼便ち去らんとす。俱胝曰く、

天勢稍晩れぬ。且く留まつて一宿せよと。尼曰く、道い得ば即ち宿せんと。胝又た無對。尼便ち行く」

實際尼は馬祖様のお弟子様です。真の坐禅人の静かで嚴かな姿勢に言葉を失つた俱胝和尚はようやく口を開きました。「もう日が暮れようとしています。一晚泊まつて、お話を聞かせていただけませんか」すると實際尼再び「二句あなたの境界を言つてくだされば拝宿させていただきます」やはり俱胝和尚は何も答えられません。

實際尼は「はい、さようなら」と去つていきました。

「胝嘆曰、我雖処丈夫之形、而無丈夫之氣。遂発憤要明此事、擬棄庵往諸方參請打疊行脚」

「胝嘆じて曰く、我れ丈夫の形に処すと雖も、而も丈夫の氣無しと。遂に發憤して此の事を明らめんと要して、庵を棄てて諸方に往いて參請し、打疊行脚せんと擬す」

俱胝和尚はその晩大いに嘆き、葛藤します。「あゝわしは何と情けないことだ。皆に俱胝和尚と云われて今の自分に満足していただけない。一人前のお坊さんの恰好をしていても、旅の尼僧さんの質問に何も答える事が出来なかった。恥ずかしいことだ。わしの修行とは

何だつたのか、また一から出直した。此の庵を畳んで行脚の旅に出よう。しかしあの尼僧さんは一体何者だつたのだろう」

打疊行脚と云う言葉が重みを持つています。打疊とは折り畳み始末する事、行脚は佛法を求め諸方の師に参じる修行の旅に出る事です。俱胝和尚が自分の住んでいた庵を畳むだけではなく、今までの自分の修行も一切を片づけて、真に一から出発する覚悟の言葉です。これは私達の平常の佛道修行にも言える事です。實際尼が笠も下さず、名乗らずに居たのも、それを伝えなかったのかもしれない。

私はここ瑞應寺で多くの修行僧と同行同修のご縁を戴いておりますが、この辨道は世界中の全ての人々の「苦」と「祈り」、佛祖方の「誓願」と共にあるのです。今までの自分の一切を棄てて大衆一如の行持に専心しなければ安居に成りません。それが打疊行脚です。

農民の姿を借り庵を構え、たった一人きりの坐禅。それも出来る事ではありませんが、それを更に棄てて、今ここから新しく修行に出發するのです。私達は俱胝和尚の覚悟を見習わなければいけません。(続く)

笑いながら学ぶ禅の智慧

智の極致「無分別」でサゲる禅問答パロディ

高岩寺 来馬明規

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職・医師・医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員

【はじめに】

今月は有名な『般若心経』と深い関係がある「無分別(むふんべつ)」をテーマにした、禅問答のパロディをご紹介します。

さて、一般社会で用いられる「無分別」は「無分別な若者」のように、未成熟や無礼などの悪い態度を指す言葉です。ところが仏教では、「さとり」とは同じ意味になり、仏の心のありようを示します。

みなさんが本稿を読み続けているうちに、話の面白さに気づき、笑いながら、「無分別」という絶対の幸せを掴むきっかけになれば、筆者は心底うれしく思います。

【役人が禅僧をやり込める笑話】

中国の明の時代(一三六八〜一六四四)に編纂された笑話集『笑贊』から一話を示します。(1)ユーモア溢れる、僧と役人との短い問答です。

【あらすじ】

- ① 寺に寺や僧を支配する役人がやってきた。坐禅を行っていた僧たちは、中断して起ち上がり、役人を歓迎した。
- ② ところが、一人の僧は挨拶もせず、黙々と坐禅を続けていた。
- ③ 自分を無視して坐り続ける僧を

見とがめた役人は、僧に問い質した。

「なぜ、あなたは起立して、私に挨拶しないのですか?」(無礼者!)

④ 僧は答えた。

「起つことは起たないことであり、起たないことは起つことである。」

(私は起つ起たないを分別(区別)しない。あなたには坐っているように見えるかもしれないが、起つてあなたを歓迎しているのが分からぬか?)

儒教にかぶれた頭では、禅仏教の奥義「無分別」は分からないだろう。

⑤ すると役人は禅杖で僧の頭を打った。

(★ハキツ★ 下のイラスト)

⑥ 僧が反問した。(痛いナア!)

「なぜ、私を打つのですか?」

⑦ 役人は言った。

「打つことは打たないことであり、打たないことは打つことである。」

(それなら私も無分別で行くよ!)

打つ打たないを区別しない。どうだ、私はオマエを打っていないだろう! 痛いことは痛くないことだろう! 分かっているのはオマエの方だ!)

【原文の読み下し】

① 士人、寺中に入る

衆僧みな起つ

② 一僧、ひとり坐す

③ 士人曰く

「何ぞ起たざる?」

④ 僧曰く

「起つこれ起たざる、起たざるこれ起つ」

⑤ 士人、禅杖を以てその頭を打つ (左のイラスト)

⑥ 僧曰く

「何ぞ我を打つ?」

⑦ 士人曰く

「打つこれ打たざる、打たざるこれ打つ」

趙南星『笑贊』三「僧與士人」

【順を追って解説】

① 士人、寺中に入る 衆僧みな起つ

「士人」とは、競争率が数千倍ともいわれる、中国の超難関の公務員試験「科挙」に合格して採用された、きわめて優秀な役人のことでしょう。彼らは文学、歴史、宗教などのあらゆる教養に通じています。高級官僚の道理すなわち「分別」をわきまえたインテリとして、儒教精神が身心にこびりついています。仏教は儒教と相容れないところもあります。この役人は禅仏教にも造詣が深いと推察されます。

おそらく役人の訪問は、寺院を厳しく支配統制する中央政府の使者として、命令の伝達や、内情の視察などが目的だったのでしょう。僧たちは、失礼な振る舞いで「国王

の使者」に、悪い印象を与えてはいけません。大多数の僧が「役人に礼を尽くす」ことを「坐禅を続けること」よりも優先させ、役人を出迎えて歓迎しました。

【意外な展開その1】

② 一僧、ひとり坐す

③ 士人曰く「何ぞ起たざる?」

ところが一人だけ生真面目、悪く言えば生意気な若い僧がいました。「自分はこの瞬間、大切な仏道修行に打ち込んでいます。たとえ礼を尽くすべき役人が来ても、自分は修行を中断しない。長いものには巻かれな

いぞ。」という思いがあつたことでしよう。純粹で正論にも見えますが、意固地で独りよがりとも解釈されます。

さて、広い坐禅堂(僧堂)にひとりぼつんと坐つていれば、すぐに「悪目立ち」してしまいます。役人は僧の傍らに立ち、真意を質します。「他の僧衆は、起つて挨拶しているのに、なぜあなたは(私に礼を尽くさず)に起たないのですか?」と尋ねました。

何気ない会話のようでもありますが、筆者にはこのセリフの行間に、「儒教役人」と「仏教僧」が火花を飛ばしてぶつかり合っている様が垣間見えます。

禅仏教の始祖、達磨大師は、九年もの間、坐禅を行じ続けたとされています。その後継者たる一僧が、突然やってきた役人の「身分の上下・権力の大小」に左右され、「只管打坐

士人「打是不打 不打是打!」



僧「起是不起 不起是起!」

「ただひたすら坐禅を行じること」を中断することはあり得ません。

役人の方こそ、坐禅が一段落するまで待機することが如法であり、「僧に対する帰依」というものです。寺を管理する立場なら、接客可能な時間帯も心得ていたはずです。あるいはわざと修行の時間を見計らって訪問した、とも考えられます。

一方、役人の立場から観れば、仏教僧であろうとも、儒教の基本原則「礼」(秩序を維持する規範や儀礼)と「仁」(思いやり、人間愛で社会を見守る心)の実践を求めることでしょう。坐禅を中断し、挨拶に出向いたからといって、修行に悪影響があるとは考えません。

このような対立の構図のなか、役人は僧の頑なな心中を見抜いたうえで質問しているようですから、素直に「私のかげがえのない修行を邪魔しないしてほしい」とでも言えば、打たれずに済んでいたような気がします。

【意外な展開その2】 ④僧曰く「起つこれ起たざる、起たざるこれ起つ」

ところが僧の答えは挑戦的で難解でした。この「起たないことは起つこと」という言葉には重要な背景があります。

まず「AはBである」という表現を強めるために、「AはBであり、BはAである」という倒置法を用いています。これは良いのですが、「Aは非Aであり、非AはAである」と

とは目茶苦茶な言い回しです。難解な禅の教えをひけらかして、非礼をケムリに巻いているように見えますが、この言説の理解が笑いのカギになっています。

私たちが「不幸せ」で悩むのは、自分で「幸せ」を身勝手に定義し、その定義から外れている自分を対象化してながめているからです。「幸せ」を定義せず、「幸福」と「不幸」の線引きをしないこと、つまり肯定と否定の比較(二項対立)をやめることが、真実の幸せにつながる智慧、「無分別智」なのです。

同じように、この僧は「起つ・起たないを同一視し、分別しない」ことを示して、寺の中で身分や礼節などの分別を振り回す役人に對し、「禅仏教の奥義」を主張したかったのです。目上に挨拶することは「分別」です。分別は「身勝手な主観によつて組み立てられた虚構」であり、禅仏教では巡りめぐつて執着や、苦しみの元になると捉えます。

分別を乗り越えて一切の対立を排除し、真理を見抜く智慧「無分別智」は僧は絶好の機会を得て、体を張つて役人に示したつもりでした。

【意外な展開その3】 ⑤士人、禅杖を以てその頭を打つ

しかし、僧は本来言葉では表現できないはずの無分別を「起つこれ起たざる、起たざるこれ起つ」と言つてしまいました。聡明な役人は、

僧の心に「挨拶より修行」「役人より僧侶」「儒教より仏教」という独善的な分別が潜んでいて、僧の言葉が「見かけ倒しのインチキな無分別」であることを見破りました。

そこで、坐禅中の眠気を戒められたために、肩や背中を叩く法具「禅杖(ぜんじょう)」で、僧の頭を打ちました。僧は驚いたことでしょうか、痛みの自覚」という分別をさらけ出すことによつて、主張に抜け穴があることがばれてしまいました。

【意外な展開その4】 ⑥僧曰く「何ぞ我を打つ？」

⑦士人曰く「打つこれ打たざる、打たざるこれ打つ」

うろたえながら打たれた理由を質す僧に對し、役人はダメを押すように「打つことは打たないこと」つまり非難することは非難しないこと、と切り返して僧の非礼と独善を指摘しました。

役人の言葉は、僧の言葉の「起」を「打」に置き換えただけですが、見事な反論になっています。①漢文の「頂真法」末語が次の句頭と同じ)の変法、②現代語の「逆用(reversal)」、③禅録の「転語」「借語」などと呼ばれる修辞法で、笑い話の面白さをさらに引き立たせる痛快な言い回しです。

【維摩居士の真似をすれば…】

それではどうすれば僧は叩かれずに済んだでしょうか？
本誌四月号でも紹介した『維摩経』

の、「不二の法門」にそのヒントがあります。(2)この章では菩薩たちが順々に「不二の法門(無分別智のありよう)」を表現していきますが、言葉では上手に表現出来ず、誰も無分別の核心に至ることは出来ませんでした。最後に文殊菩薩が主人公の維摩居士に見解を尋ねます。

【現代語訳】

文殊菩薩が言った。「維摩居士さん、不二の法門を説いてください。」

しかし維摩居士は沈黙して何も語らなかった。

【漢訳の読み下し】

(文殊菩薩曰く)

「仁者(維摩居士)、当に説くべし

何等(なんぞ)か是れ、菩薩不二の法門に入るや」

時に維摩詰は默然として言なし

【維摩経】

第九章 不二の法門に入ること

右は「維摩の一點雷(カミナリ)の如し」と呼ばれる有名な一節です。「無分別」を言葉で表現するには沈黙しか方法がないのです。『笑賢』の僧も「維摩経」を真似して押し黙っていれば、打たれなかったかもしれません。でも、それは笑い話にはなりません。

【まとめ】

当時の中国でも、「禅仏教はちんぷんかんぷんでわかりにくいもの」と思われていたことが、この笑い話からも推察されます。わずかな文字数で、意外な展開が四回も連続し、役人・僧侶の対立と無分別(非対立)が面白おかしく表現されています。

本話は禅仏教の笑い話のなかでも、傑作中の傑作と考えられます。

【原文】

有士人入寺中。衆僧皆起。一僧獨坐。士人曰「何以不起？」僧曰「起是不起、不起是起。」士人以禅杖打其頭。僧曰「何以打我？」士人曰「打是不打、不打是打。」

Chinese Text Project Wikiほか

【参考】

(1)『笑賢』明の進士(官僚)、趙南星(二五〇〇・一六二七)作の笑話集、72話の集成、同話が『笑禪録』6に重出あり。
『笑府』21「明道雜志」に同様の笑話あり。

①松枝茂夫 古典文学大系 歴代笑話選59 平凡社 昭45 P.111、143、205。
(2)『維摩経』①植木雅俊 岩波書店 P.400。
②「維摩の一點雷」は當山後堂老師本誌提唱中の『碧巖録』第八四則に「維摩不二法門」として登場。
③『維摩経ファンタジー』西村恵信 禅文化研究所 令和3年、平易で秀逸。



◆なすことの

一つ一つが楽しくて
命がけなり遊ぶ子供ら

瑞應寺の境内にある、ひかり幼稚園で、先日運動会が行われ、私は写真撮影のお手伝いとして参加しました。子供たちの一生懸命取り組む姿をレンズ越しに見ていると、この言葉が浮かびました。

「なすことの 一つ一つが楽しくて 命がけなり 遊ぶ子供ら」

この句は、かつて瑞應寺で指導された橋本恵光老師が、ひかり幼稚園で遊ぶ園児の姿を見て詠まれたものです。

リレーで逆転できず泣いて悔しがる子、いつもの練習とは違ってたくさん保護者の姿に驚いて泣き出したり、固まったらまた動けなくなる年少さん、親が来てくれたのが嬉しく手を振ってたら行進の道から外れて行ってしまう子、先生の声かけに大きな返事をする子たち、子供たちは皆、純粹に運動会を楽しみ、目の前の事に全力を尽くしています。

一方で大人になると何をするにしても、損得勘定や、過去の失敗や未来の不安が頭に浮かんだり格好ついたり、余計な事に神経を使ってしまう、なかなか全力を尽くすことができません。



般若入

■般若入
五月下旬より、当地区恒例行事である「般若入」を厳修。作付けの時期に合わせて地域の五穀豊穰・家内安全・身体健全を祈願した。



しかし、私たち僧侶が行っている修行は、たくさんのお祖師方が命がけで、今日まで伝えてくださったものであり、そんな中途半端な気持ちで受け取れるものではありません。今、この瞬間に命がけで取り組む。修行を続ける上で大切なことを、園児の皆さんに教えてもらいました。

瑞應寺専門僧堂 悦事 三宅俊尚
令和七年六月一日〜十日

六月の日鑑

- 一日 祝禱・日曜参禅会
- 八日 日曜参禅会
- 十四日 ベルモニー葬祭合同慰霊祭 NEC役員研修
- 十五日 祝禱・日曜参禅会・略布薩 會陽林グループ参禅
- 十八日 観音講（仏教勉強会）
- 廿二日 日曜参禅会
- 廿四日 参玄会（廿六日迄）
- 廿九日 日曜参禅会
- 卅日 略布薩

七月の予定

- 一日 祝禱・首座法戦式
- 六日 日曜参禅会
- 十一日 筆供養・弁天大祭
- 十三日 日曜参禅会
- 十五日 祝禱・略布薩
- 十八日 観音講（仏教勉強会）
- 廿日 日曜参禅会
- 廿七日 日曜参禅会
- 卅一日 略布薩

瑞應寺公式ホームページ
を開設しました

4月より
公開しました



<https://zuioji.jp>

瑞應寺研修感想

●浅川造船(株) 新居田 悠人

今回の研修では、地域の歴史と文化を深く知る貴重な機会になりました。

瑞應寺は開山から約五百八十年となる長い歴史を有する寺で研修では、自分達が普段生活でしている食事や掃除など当たり前の事を丁寧に行うことなど、礼儀作法を学ぶことができました。

また、瑞應寺の周辺には新居浜市の歴史を物語る遺跡や文化財が点在しており、研修を通じて地域の歴史的背景をより深く理解しました。これらの学びで、地域づくりや文化継承の重要性を再認識することができました。

今回の研修を通じて、地域の歴史と文化の大切さを改めて感じ、今後の生活に生かしたいと思いました。瑞應寺での研修は私にとって大変有意義な経験となりました。

二日間貴重な経験をさせてもらいました、たくさんの方のサポートをさせていただき本当にありがとうございました。

●浅川造船(株) 藤 田 健斗

本研修を通して、曹洞宗の日常業務、生活の一部を体験すると共に、基本の教えである日常の一つ一つの所作を丁寧に行う大切さを学びました。食事の作法では、人や物に敬意を払うだけでなく、使う水

を極力減らす、無駄にしない工夫が施されており、自然環境のことをよく考えた教えだと感じました。

坐禅で意外だったのが、修業としてというよりも、エネルギーを貯めるために行うものということでした。実際にやってみて、長時間背筋を伸ばす体勢による、筋肉的な疲労は感じましたが、呼吸のしやすさや集中して考え事ができる感覚があったので、簡易的にはなると思いますが、これからの生活の中でも取り入れたいと思います。

この二日間で、非常に貴重な体験をさせていただきました。この経験を基に己を律し、人物、生き物に敬意を払っていきたいと思います。本当にありがとうございました。



鐘 声

7月に入り、暑い日が続いております。

「心頭滅却すれば火もまた涼し」といわれますが、確かに心を律することである程度の暑さは乗り越えることが出来るかも知れません。しかし、ここ数年の気温上昇による猛暑が私たちの生活に影響をもたらしていることは事実です。修行においても体調管理に努め、身心を調えて参ります。

受処主事 森香有